

地域振興に関するライフヒストリー聞き取りの試み —インド・ラダーク地方の一村落における事例—

野瀬光弘

京都大学東南アジア研究所

農山村での過疎と高齢化が世界各国で深刻な問題として取り上げられるようになって以来、地域振興は社会学や経済学など様々な分野で調査・研究が進められてきた。このテーマでは、研究者として対象から情報を収集、解析した成果を論文に仕立てるとともに、個人として地域に貢献することも求められる。本稿では、足かけ6年にわたって調査を進めてきたインド北部ラダーク地方のドムカル村において、地域再生の一環で進めた物産誌づくりを行うプロジェクトに参加したことを契機に、住民9人を対象に聞き取ったライフヒストリーの内容と派生的に考察したことを報告する。聞き取りによると、50～60歳代の男性は軍関連の仕事に従事していた経験が多いのに対して、同世代の女性は村内にとどまって農牧畜複合経営の中心的な担い手だったことが判明した。来訪者に推奨する景観としては、アプローチの難しい「ゴンパランジョン」をあげる人が大半で、日常的に見られるものへの評価は確立されておらず、第三者的な視点を獲得する段階に到達していなかった。

1. はじめに

国内では、農山村における過疎化は1960年代から活発に論じられ、今日に至るまで数多くの書籍や論文が刊行されている（米山（1969）¹⁾、安達（1981）²⁾、大野（2005）³⁾などに代表される）。1960年からの人口推移を圏域別にみると、1970年代までの間に三大都市圏で10%台の人口増加が認められた一方で、過疎地域では同期間に5%から10%近く人口が減少している（図1）。これは、太平洋ベルト地帯における重化学工業を中心とした製造業や付随するサービス業の発展に伴い、農山村から都市への人口移動が起こったことを端的に示している。1995年以降も地方圏とともに過疎地域は人口減少幅が徐々に拡大しつつある。こうした地域における高齢化の進行は非常に顕著で、2005年の時点で65歳以上の比率が30%を超えるなど、都市部に先んじて高まってきた。人口減少と高齢化は、進み具合の違いはあっても全国的に起こっており、特に都市部ではその傾向に拍車がかかるとされている⁴⁾。国は「過疎地域対策緊急措置法」を10年の時限立法として制定するとともに、これまで4次にわたって、いわゆる「過疎法」が制定され、各種の対策が講じられてきた経緯がある。2014年時点では「過疎地域自立促

進特別措置法の一部を改正する法律」の法期限が延長されたために、様々な施策を打ち出す根拠の一つとなっている。

ところが、地方自治体独自の方策も含めてこれまで努力を積み重ねてきたにもかかわらず、ごく一部の事例（長野県下條村⁵⁾、島根県海士町⁶⁾、岡山県西栗倉村⁷⁾などが代表的）を除くとほとんど若年層の流入には直結していない。これらの町村のうち、下條村では職員の給与削減といったコストカットが進められた代わりに、中学生までの医療費の無料化や保育料の引き下げなどを行った⁸⁾。海士町と西栗倉村では「株式会社ふるさと海士」、「西栗倉・森の学校」という事業体がそれぞれ設立され、若年層の雇用の場として重要な役割を果たしている。しかしながら、合計特殊出生率が2に近い下條村を除くと人口減少と高齢化に歯止めはかかっておらず、取り組みが面的に広がっているとはいいがたい側面がある。また、徳野（2010）は町村での人口減少を所与の事実として受け入れ、他出している家族も含めた地域定住動向の分析や非農業的就労などの実態把握の重要性を唱えている⁹⁾。確かに、日本全体で人口減少と高齢化が進んでいる状況下では、ごく限られた地域を除くとその反転は非常に難しく、現実の姿を反映し

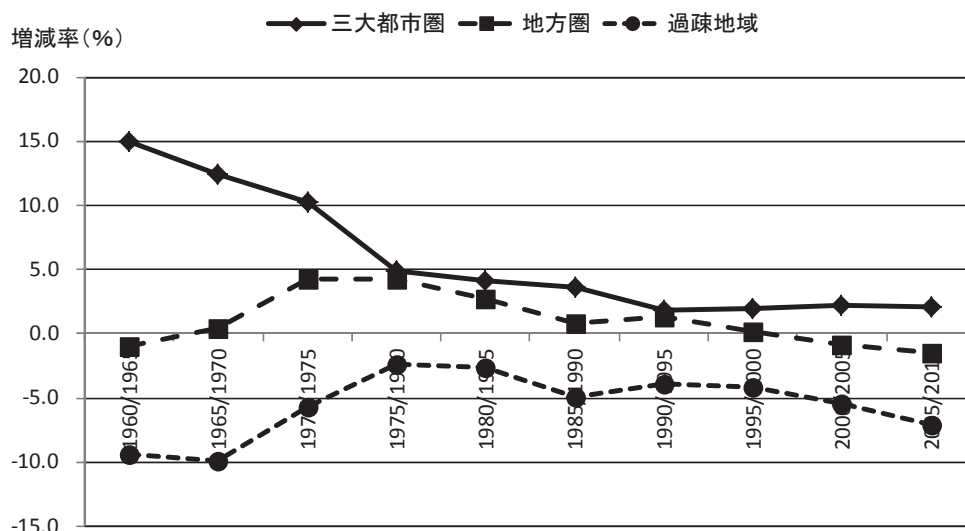


図1 圏域ごとの人口増減率（1960年から2010年）
資料：各年版国勢調査。

た方策が求められる。

個別の地方自治体全体を巻き込むような振興策は実現可能性が低い、2000年代後半に始まった「集落支援員」や「地域おこし協力隊」はそれぞれ全国に数百人単位で草の根の活動を展開している¹⁰⁾。多くの地域では具体的な活動のイメージを作れていないとの指摘があり¹¹⁾、必ずしも地域の実状にマッチした人材の配置ができていない事例がみられる。一方、森林・林業関連では独自に様々な活動を展開している人もいて、モノグラフ的に書籍で紹介されている¹²⁾。同書は出版記念のトークイベントが複数回開催されたほか、主にネットメディアでの紹介を通じて活動の内容が評価され、波及的な広がりをみせている¹³⁾。こうした個人の取り組みに焦点を当てた研究を学術的にみると、質的社会学の一環としてライフヒストリー調査が進められており、アイデンティティの確保や自らの存在証明として意義があるとされている（詳細は有末（2012）¹⁴⁾を参照のこと）。また、ジェンダーの観点から農山漁村の女性の活動が地域社会に及ぼす影響を取り扱った研究もあり¹⁵⁾、活動の具体的な中味を事例で紹介している。

2. 課題と方法

地域振興のあり方として、自治体を単位とするだけではなく、個人にクローズアップする方向性が出てきている中で、研究手法のバリエーションを増やす余地が出てきている。すなわち、多数のデータに基づいた数理的な解析によって定量的な傾向を示すのみならず、少数の事例を定性的に紹介することで、個別性を際立たせるとともに底流にあるエッセンスを描き出すことである。ここでの研究者のスタンスとしては、世界に通用するような普遍的なモデルづくりよりも、それぞれの地域に密着した取り組みの意義を明確にしようとする立場といえる。だからといって俯瞰的な立場が否定されるわけではなく、図2に示したように世界的な視野を持ちつつも、調査で関わりのある地域についてはなるべく対象を掘り下げることを前提としている。調査対象地の数が増えすぎると、各地域の実状把握が難しくなるが、関与の仕方を工夫しながら住民とコミュニケーションを取る姿勢を保てれば、国内外で「地に足の着いた取り組み」が可能となる。

本研究では、2009年から足かけ6年にわたって調査を進めてきたインド北部ラダーク地方ドムカル村を対象に、物産誌づくりを前提とした住民

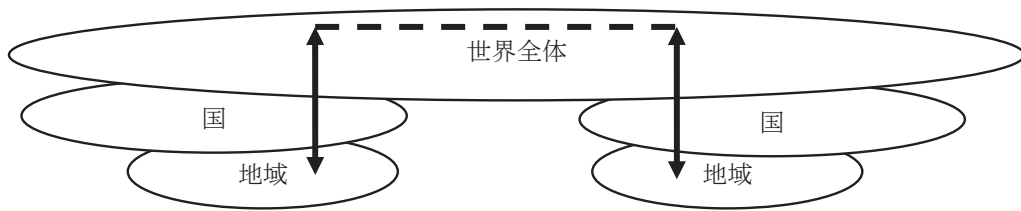


図2 研究者の立ち位置（概念図）

注：2か国のみに限定。

のライフヒストリー聞き取りを9人に行った。住民の所在地は、上村4人、中村3人、下村2人で、うち男性は6人、女性は集落から1人ずつの計3人だが、男性1人はふだんレーで暮らしている。すでに、山口（2010）は同村落の農牧複合経営と村外での就労実態を詳細に述べており¹⁶⁾、標高に伴って環境条件の異なる集落ごとに果樹栽培や植林といった方向性を模索していることが明らかにされた¹⁷⁾。これらの調査を通じて、知己を得たパンチャーヤトの議長が紹介した住民に対して、子どもの頃の思い出、仕事を始めるまでの経緯、関与している地域活動や行事、来訪者に推奨する村内の印象的な景観、教育やインフラなど今後の課題などを具体的に尋ねた。なお、聞き取りに当たっては、国内の実例として高知県仁淀川町の公式ガイドブックを持参し¹⁸⁾、物産誌の趣旨を説明してから同意を得よう心がけた。同書には特産物や人物紹介のページがあり、プロジェクトで取り組みようとしている内容を類推する材料となりうる。単に情報を聞き出すだけでは住民が関心を集めない可能性があるため、併せて京都市北区の北山三学区（小野郷、雲が畑、中川）における「まちづくりビジョン」¹⁹⁾の報告書を示した。いずれも日本語で書かれているが、写真が多用されていることもあって、ある程度は理解が得られたと思われる。紹介した事例とまったく同じことはできないとしても、「まちづくりビジョン」のように、3つの学区にそれぞれロゴマークを作ってコミュニティの結束力を強める取り組みは共感が得やすいツールとなった。また、同ビジョンをもとに製作されたステーションナリー（クリアファイル、バッジ、マグネットなど）を見せながら説明したので、さらにイメージが膨らんだと推察される。

3. 住民のライフヒストリー

ライフヒストリーを聞き取った9人はそれぞれゴンマ（上村）4人、バルマ（中村）3人、ド（下村）2人で、女性は各集落から1人ずつ選定された。年齢は50～60歳代が9人中8人となってやや偏ったが、1人のみ30歳代と比較的若く、世代による違いをある程度は認識できた。なお、聞き取りと併せて2009年に作成した住民リストの修正作業を行ったため、村落住民の全体的な動静把握につながった。

50～60歳代の男性5人（以下では「壮年男性」とする）のうち、2人は小学校（Primary School）に通っていたが、1人は修了年限以前に中退して農牧畜の手伝いに従事した。他3人は学校へ行くこともなく、親に連れられて10歳前後から農牧畜を始めるようになった。女性3人はいずれも学校へ行った経験はなく、幼い頃から家事全般の手伝いを始め、早い人は13歳、遅くとも19歳には結婚して生まれた場所を離れた。30歳代の男性（以下では「若年男性」とする）はドの小学校と中学校（10年間）、レーの高等学校（2年間）、カシュミールの大学（3年間）といったようにキャリアを順調に積み重ねていった。こうした学校教育を受けた人は、2014年時点の30歳代以下では大きな比率を占めており、僧侶になった場合を除くと例外は非常に少ない。

壮年男性が10歳代から20歳代だった頃は交通網が未発達で、トラックなど車両を用いた輸送はほとんど行われていなかった。カシミール紛争によって国境は越えられなくなったが、交易に従事していた人もいて村からは5～6人のグループで馬に乗ってロバを連れて行き、1970年前後まではオオムギの実、ツァンパ（オオムギの粉）、ア

ンズを運び、チャンタンで塩、薬、羊毛などと交換していた。その後、家畜を使った交易のノウハウを活かせる軍事基地での物資輸送を行い、長い人で約20年、2000年代前半まで従事していた。仕事内容は、低地から高地へ軍の装備、燃料、食料などをロバで運ぶもので、途中で食事をとる余裕がなく、銃弾が飛び交う場合もあって非常に怖くて体力的にも負荷の大きい仕事だったという。他にも軍のレストランでの料理人や書類を配送するメッセンジャーといった仕事もあり、軍事基地の存在の大きさがうかがえる。しかしながら、現金収入を得る手段としては心身の負担が大きいこともあってか、親族が軍人や教員といった相対的に安定した仕事に就いたことを契機に全員が中断している。また、上村の壮年男性は2003年頃からレーにおいて乾燥アンズやクルミなどの路上販売を行っており、2～3日続いて村に滞在する機会は年に2回ほどになっている。これは、同じ村内でも地理的条件が悪い高標高地ほど在村し続けることが難しいことを示唆している。壮年男性がいわゆる「出稼ぎ」をしている間に、女性は若い頃から家事などをこなしながら、上村と中村では農業と牧畜、下村では園芸も加えて作業の中心的な担い手となっていた。自給用の作物づくり以外に、エンドウマメなどはかつてレーまで背負って販売に行き、子どもの教育費をまかなっていた。子どもたちが小さい頃は、畑の傍らに置いたバスケットに入れながら農作業を行うなど、負荷が大きいながらも奮闘した様子がうかがえる。

そういった苦労が実り、上村の1人を除いた壮年男性は在村で農業、牧畜、園芸などの作業をしながら日々過ごしている。農産物の販売としては、上村ではエンドウマメ、中村と下村ではリンゴやアンズの苗や果実といったように集落ごとに異なり、中村には集落の水路管理を行う公的な仕事をしている人がいる。他の野菜や乳製品はほぼ自給用で、すでに子ども世代はおおむね学校を卒業しているため、教育投資目的の現金を稼ぐ必要性は小さくなっている。また、若年男性は高等学校を卒業して大学に進学し、レーで教育方法を学びながら、教員生活を始めるという経緯をたどった。その後、複数の学校に2～3年ずつ勤務し、2014年になって村内の高等学校に赴任することになったという。このように、教職につけた人はそれほ

ど多くはないが、相対的に30歳代以下ではレーなどにおいて様々な職業を選択している人の比率が高い。下村は地理的に便利なこともあって、女性の中には週末になると子ども世代が孫とともに来訪、共に過ごすといった光景がみられた。村内における来訪者に推奨する印象深い景観としては、全員が「ゴンパランジョン」と呼ばれる本村落特有の聖地を答え、ありふれた日常の風景に言及したのは水流の美しさをあげた1人に過ぎなかった。同地は村落住民にとって貴重な聖地であるが、標高4,800メートル地点にあって徒歩でしかアプローチできないため²⁰⁾、対外的にアピールしにくい。

なお、当村はラダーク地方内のNGOのアドバイスもあって女性の社会活動が2000年頃から進められており、中村には「Ama Tsogspa」と呼ばれる団体がある。メンバーは中村在住の女性約40人で構成され、年に2回のミーティングでは、村落開発に関する課題、文化や伝統の保全などを話し合っている。他にも、カシミールのショール、靴下、手袋、セーター、ベルトづくり、アンズ製品やエンドウマメの集荷・販売を手がけており、一種のマイクロファイナンスとして、会員から集めた30万Rsを3人に10万Rsずつローンとして貸し付け、車の購入や家の建設などに使ってもらっている。また、下村には女性12人が集まって2000年頃に設立された「Semskit Thogspa」という団体があり、園芸作物栽培の先進地に視察へ行くなどといった行政主導の事業に合わせた活動を行っている。

これまで述べたように、当村落では50～60歳代の男性が出稼ぎなどで現金収入を得つつ、女性が農牧作業を担うことで家を支え、次世代の教育投資を進めたおかげで30歳代以下の男女が大学まで進学することが多く、多様な進路を選択できるようになった。必ずしも希望どおりの就職に至っていないとしても、農牧畜業以外に従事している若年層の比率は上の世代より明らかに高い。ただし、村内には少ないながらも50歳代以上でも教員になっている男女がいて、1970年代には教育を受けた住民が複数いたと推察される。さらに、進学はジャンムーやチャンディーガルなどへ行くが、少数の人を除いて就職や通婚がラダーク地方内で行われていることが多い。これは、ラダー

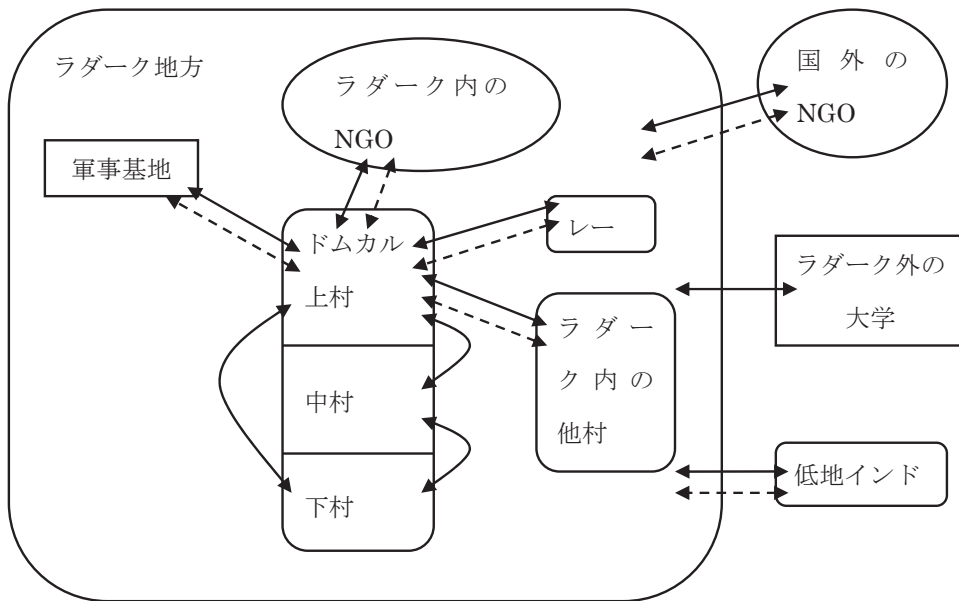


図3 ドムカル村落住民を取り巻く諸環境の模式図

注：人・情報の流れ ————— 物・お金の流れ - - - - -

キーとしてのアイデンティティを保ちながら生活を送る選択肢を採用しており、民族、文化、宗教といった連帯感の強さが背景にあると推察される。その状況を模式的に示すと図3のようになり、村内外の様々な組織との人や情報、物やお金のやり取りを通じて社会経済的に維持されている。気候的に厳しく、他国と境を接する地政学的な位置にあることで作り出された関係性といえる。また、かつての交易は他地域の人と触れ合う機会となり、ラダーク地方に来訪する国内外の観光客を受け入れる開放的な姿勢は持つ基盤になっていると考えられる。

4. まとめと今後の展望

本報告では、インド北部ラダーク地方の1村落において住民から聞き取ったライフストーリーの聞き取りとその地域振興への影響について、可能性と限界を記述した。その内容は以下の3点にまとめることができる。

第一に、50～60歳代の男性は学校教育を受けた経験が乏しく、交易や軍事基地の仕事に一度はついた経験を有し、農牧畜複合経営を一年中継続

していた人はいなかった。当村落では自給が元々難しい上に商品経済が浸透しており、1970年代以降は子どもの学費や生活必需品の入手など、現金の必要性が高くなっていったことが示唆された。いわゆる「出稼ぎ」にそれほど違和感はなく、村落内の資源だけでは不十分なことへの認識はおおむね共通だといえる。

第二に、聞き取りした全員が来訪者に推奨する景観にゴンパランジョンを挙げ、そのうち1人のみが村内の水流と回答した。これは、京都府美山町（現在の南丹市）において茅葺きの景観が住民の間で高く評価されていなかったように²¹⁾、古くからある建物や放牧地などといった日常の風景の美しさに気づいていないことが考えられる。若年者の中には進学でラダーク地方以外のジャンムー、チャンディーガル、デリーといった都市部での生活を経験した人が増えており、今後はUターンで村に戻った時に価値を再認識する可能性が出てくる。

第三に、子どもが少なくなっていることに危機意識はあっても、地域振興への関心が希薄な人が多かった。村内は2014年9月の時点で電気が19

時から23時まで、携帯電話が下村以外は使えないなど不便な面がいくつもあり、住民の間では人口の減少・高齢化は顕在化するまでに至っていないと考えられる。しかも、村外に転出した人の多くはラダーク地方内に留まっており、レーからの移動時間が短くなったこともあって、週末に滞在するなどコミュニケーションを密に保っている世帯もある。

以上のように、2014年9月に実施したライフストーリーの聞き取りをもとに地域振興との関係性を述べてきたが、今後も取り組みを継続する上では大きく分けて2つの展望が見えてきた。

第一に、アジア諸国で人口減少が見込まれる中で²²⁾、たとえ国全体では人口が増加し続けても辺境地では過疎化と高齢化の進行は不可避である。本稿で述べたライフストーリーの記述は、地域振興と直結するわけではないが、住民個人の持つポテンシャルを引き出し、地域の魅力を発信する仕掛けは重要となる。今回の聞き取りは、初期段階として当該住民に物産誌の存在を知らしめたことから、何らかのアクションを起こす小さな一歩にはなったと考えられる。

第二に、日本各地でこれまで進めてきた取り組みの紹介と情報交換の必要性である。過疎化と高齢化の進行が早い国内では、様々な施策が講じられ、上述のように際立った人材が各地で生まれている。実際に、地域再生のモデルとして研究者の実践参加などとともに外国人を含む地元以外の人物との情報交換が提唱されている²³⁾。外国人も含めた交流人口の増加は住民にとってエポック的な出来事となり、外部の目を通して誇りを持って地域で暮らすことの意義を発見する機会になりうるであろう。現段階では、調査対象の村落住民が外部からの来訪者との程度交流の機会を持っているかは把握できていないが、若い世代を中心にネットメディアを用いる習慣は広がっている。こうしたバーチャルな結び付きを含めて、情報発信する方策をサポートするあり方を模索する時期に来ている。

謝辞

本稿は、2012年度まで進めた総合地球環境学研究所プロジェクト「人の生老病死と高所環境－高地文明における医学生理・生態・文化的適応」(代表・奥宮清人)のCR事業の一環で実施した調査結果に基づいて執筆した。現地での聞き取りにあたっては、2012年に続いてJigmet Dadul氏にはたいへんお世話になった。また、忙しい中で健康診断に来て下さった医師のノルブ先生(Ladakh Institute of Prevention)のおかげで住民の方々に調査が受け入れられやすくなったと思われ、聞き取りに協力して下さい下さった方々とともに厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) 米山俊直(1969) 過疎社会. 日本放送出版協会, 214p.
- 2) 安達生恒(1981) 過疎地再生の道. 日本経済評論社, 398p.
- 3) 大野晃(2005) 山村環境社会学序説－現代山村の限界集落化と流域共同管理. 農山漁村文化協会, 298p.
- 4) 松谷明彦(2010) 人口減少時代の大都市経済－価値転換への選択. 東洋経済新報社, 293p.
- 5) 熊野稔(2009) 農山村における少子化・定住対策の事例評価－長野県下條村を事例として. 学術講演梗概集 E-2: 397-398.
- 6) 富沢木実(2013) 海士町にみる「地域づくり」の本質. 地域イノベーション 5: 65-78.
- 7) 関満博(2010) 西栗倉村／百年の森林事業に向かう－自立に向かう「村」の取り組み. 地域開発 545: 56-58.
- 8) 熊野稔(2009) 農山村における少子化・定住対策の事例評価: 長野県下條村を事例として. 日本建築学会学術講演梗概集. E-2: 397-398.
- 9) 徳野貞雄(2010) 縮小論の地域社会理論の可能性を求めて－都市他出者と過疎農山村－. 日本都市社会学会年報 28: 27-38.
- 10) 図司直也(2012) 農山村における地域サポート人材の役割と受け入れ地域に求められる視点. JC 総研レポート 23: 23-29.
- 11) 田口太郎(2013) 地域サポート人材の研修プログラムの構築－「地域おこし協力隊」「集落支援員」の研修プログラム. 農村計画学会

誌 32(3): 364-369.

- 12) 古川大輔・山崎亮 (2014) 森ではたらく！
27 人の 27 の仕事. 学芸出版社, 240p.
- 13) 森ではたらく！—27 人の 27 の仕事
(Facebook) < <https://ja-jp.facebook.com/mori.job.gkg> > (2014 年 9 月 28 日閲覧)
- 14) 有末賢 (2012) 生活史宣言—ライフヒストリーの社会学. 慶應義塾大学出版会, 394p.
- 15) 秋津元輝・藤井和佐・澁谷美紀・大石和男・柏尾珠紀 (2007) 農村ジェンダー—女性と地域への新しいまなざし. 昭和堂, 234p.
- 16) 山口哲由 (2010) ラダーク地域における村落の変容—山地における人と環境の結びつきに関する考察—. ヒマラヤ学誌 11: 78-90.
- 17) 山口哲由・ソナムゴデアップ・野瀬光弘・竹田晋也 (2013) ラダーク山地社会における農林牧複合の農業形態と土地利用の変容. ヒマラヤ学誌 14: 102-113.
- 18) 仁淀川町公式ガイドブック 仁淀川町で遊ぶ本 < http://www.town.niyodogawa.lg.jp/life/life_dtl.php?hdnKey=1004 > (2014 年 9 月 29 日閲覧)
- 19) 北山三学区まちづくりビジョン < <http://www.city.kyoto.lg.jp/kita/page/0000163658.html> > (2014 年 9 月 30 日閲覧)
- 20) 小林尚礼 (2013) 「森のチベット」アルナーチャル・プラデーシュ州西部における自然信仰の聖地の今とその特色. ヒマラヤ学誌 14: 140-155.
- 21) 岩松文代・岩井吉彌 (2001) 山村集落の活性化に関する合意形成と住民リーダー—京都府美山町における景観保存を事例として—. 日本林学会誌 83(4): 307-314.
- 22) 早瀬保子 (2004) アジアの人口—グローバル化の波の中で—. アジア経済研究所, 304p.
- 23) 安藤和雄 (2012) 在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究最終報告書 (ざいちのち), 1-12.

Summary

A Trial of Interview Survey with Life History of Villagers for Rural Development: A Case Study of A Village, Ladakh India

Mitsuhiro Nose

Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Since depopulation and aging in rural areas had become serious social problems globally, studies on reconstructing rural areas have been developed in various academic fields from sociology to economics. To take up these kind of topics as a researcher, individual contribution is required as well as writing a paper from the result of collecting and analyzing information from local communities in subject area. This paper particularly focuses on reporting life histories of nine locals of Domkhar, a village in Ladakh region of Northern part of India where I had researched for six years, as I got the opportunity to interview with them through participating a project to make a booklet for promoting their local products whilst helping revitalizing their community. According to the interview survey, some facts have been found; first, men age fifty to sixty years old have mostly experienced military related jobs while women in the same age group stayed in the village to be the main forces to run its agro-pastoral industry. Second, most of the villagers supported “Gomparanjon”, a hardly approached idea, as recommended landscape of their own village. That means they have not established sense of evaluating their own everyday view, and they have not yet reached to the point to gain the objective landscape on themselves.